

ドイツ人哲学者がみた 島根・日本

①



天からの呼びかけである
うか、信じられないような
不思議な出会いがあった。
99年9月、ドイツでの国際
会議終了後の余暇に、気軽
に出向いたシュツットガル
トでの偶然がフリッツ・カ
ルシュと筆者を結びつけ
た。宿泊した小さなホテル
で友人と日本語で話しなが
ら朝食をとっていると、こ
ちらを見つめる女性がい
た。それがカルシュの次女
のフリーデルンだった。懐
かしい日本語を耳にし、顔
はほほえんでいた。
カルシュが大正末期から
旧制松江高校(現島根大)
でドイツ語を教えていたこ
とや、親子で暮らした松江
や軽井沢、東京など、日本
での生活に話が弾んだ。
帰国後、フリーデルンか
ら届いた、彼の略歴を手記
したころから少しずつカル
シュへの思いが膨らみ、や

カルシュへの思いをさせて

がて「この人は世の中に知
ってもらわなければ……」
と思うようになった。
当時、存命だったカルシ
ユの教え子らと連絡を取
り、カルシュの人柄を知る
なかでその思いは確信へと
変わった。涙で語ったカル
シュとの交流や旧制高校時
代の思い出、印象深い言葉
から彼の誠実な人間性も浮
かび上がってきた。
07年5月、カルシュが14
年間暮らした旧奥谷宿舎

造形の美 今なお鮮烈

(松江市奥谷町)が国の登
録有形文化財になった。そ
こで、この宿舎の本格的修
復を進めるため、島根大の
関係者とともに、同年8
月、米国テネシー州チャタ
ヌーガにカルシュの長女の
メヒテルを訪れた。その
際に筆者は、3日は
ドメヒテル宅に滞在し、
倉庫の片隅に眠っていた約
2千枚の古い写真を見つけ
た。調べると、1925
年(大正14)年からメヒテル
が生まれた1928(昭
和3)年前後にカルシュが
撮影した写真が多かった。
彼女も初めて目にする写真
の添え書きを読み、筆者と
整理を進めてきた。米国から帰国後も電話や



「中海北岸の様子、1927年」と添え書
きのある写真—若松秀俊教授提供

電子メールでやりとりする
なかで写真がいつ、どこで
撮影されたかがほぼわかっ
てきた。カルシュの撮影し
た写真には日本の美しい風
景が多い。「中海北岸の様
子、1927年」とのメモ
書きがある写真はその代表
的なものと言える。カルシ
ユは島根の海と湖、陸地の
織りなす造形の美の調和に
ついて、学校の講義でも繰
り返し生徒に語りかけ、故
郷のドイツの友人にも手紙
で訴えている。

写真の数々を見つめてい
ると、カルシュの目にうつ
った当時の島根や日本の自
然や神社仏閣、人々の暮ら
しの様子が今なお鮮烈に伝
わってくる。

(東京医科歯科大学院)
教授 若松秀俊

フリッツ・カルシュ博士 1893(明治
28)年、ドイツ東部のプラゼヒツ(現ドレステ
ン市)生まれの哲学者。ラフカディオ・ハーンの
著書から日本に関心を持つ。ドイツ在住の日本
人留学生のついで、1925(大正14)年、39
(昭和14)年まで旧制松江高校のドイツ語講師を
や風景画を残した。

大正から昭和にかけ、旧
制松江高校でドイツ語講師
を務めた哲学者フリッツ・
カルシュ博士が当時、撮影
したとみられる大量の写真
が昨夏、米国で新たに見つ
かりました。宍道湖や中
海、松江城や美保関など約
80年前の島根の様子がわか
る貴重な資料です。写真な
ど遺品の整理・保存を進め
ている東京医科歯科大学
院の若松秀俊教授(61)に、
写真を通じて見えてくる当
時の島根・日本をつづつて
もらいます。

ドイツ人哲学者がみた 島根・日本

②

1月半に及ぶ航海の末に

神戸港に着いたカルシュの
夫妻は、東洋の見知らぬ国
で、不安と期待の交じり合
った気持ちでいっぱいだっ
たと思われる。松江の駅に
着いたのは25(同14)年9
月末。駅前の様子を撮影し
た「松江駅前付近の客待ち

の人力車」との添え書きの
ある写真には、当時、駅前
にあった旅館「文字屋食
堂」の建物が写っているこ
とがわかった。現在のタク
シーの客待ちと同じように
並んでいる人力車も写って
いる。

カルシュが到着した駅
には松江高校の2人の教
授が迎えてくれた。2台
の人力車に分乗して、官
舎がある松江市奥谷町に向
かった。やがて行儀良く二
つ並んだ洋館が見えてき
た。約1年前に建てられた
真新しい官舎

ま、前任のドイツ語講師の
ブラーゲが住んでいた右側
の建物に入居して、この地
での生活を始めることに
なった。
日本での暮らしが始ま
り、人々との出会いが彼を
待っていた。この官舎の周
辺は不思議なくらい気持ち
が落ち着く。ここから万寿
寺(奥谷町)や千手院(石
橋町)が近く、後に松江で
生まれたメヒテルトの遊び
場にもなった。

不安やすらぎに変化

だ。隣の英語講
師のパウマンに
あいさつを済ま
せて、そのま

彼は積極的に人々との交
流の機会を求め、周囲に温
かい心の輪を広げていつ
た。ヨーロッパにはない、
自然との語らいの雰囲気と
落ち着きが不思議な秩序を
醸し出すなかで、やがて奥
谷官舎と松江高校をよりど
ころとする彼の生活は、心
と体に大きなやすらぎを感
じる毎日に変化していった
と思われる。

松江への道



①「松江駅前付近の客待ちの人力車」との添え書
きのある写真②カルシュ一家が14年間住んだ松江
市奥谷町の官舎③いずれも若松秀俊教授提供

(敬称略)
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊

フリッツ・カルシュと日
本との出会いは、191
1(明治44)年にドイツ
東部のドレスデンで開か
れた国際衛生博覧会で、ラ
フカディオ・ハーンの家
籍などを手に取ったとき
だった。日本への関心が高
まるなか、旧制高等学校で
ドイツ語講師をする話は
ドイツのマールブルク大学
在学中に一度あったが、23
(大正12)年の関東大震
災の影響で募集が見送られ
た。だがその後、終生の
友となった、マールブルク
大に留学中の長屋喜一(後
の東大教授で哲学者)のす
すめもあって、旧制松江高
校(現島根大)のドイツ語
講師の道を選ぶことにな
る。

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

③

●1927(昭和2)年春の松江城(●)嵩山から見た松江と宍道湖(いづれも若松秀俊教授提供)

宍道湖岸の湿地帯が出雲の中心地となったのは、約400年前に堀尾吉晴がここに松江城を築いたことにさかのぼる。松江の地名の由来には諸説があるが、中国・浙江省の淞江府に似た環境から松江と名付けられたともいわれる。シンボルは市街を南北に連絡する松江大橋と併せて、壊されずに残った天守閣(国重要文化財)であろうか。千鳥が羽を上げたような屋根の格好から「千鳥城」の別名がある。

フリッツ・カルシュは旧制松江高校(現島根大)の生徒たちと連れだって、また長女のメヒテルとともに何度か城に登り、街の様子を撮影した。

千鳥城から撮影した写真を見ると、カルシュ一家が暮らした1939(昭和14)年以前の松江および周辺は、人家も少なくすっきりし、遠くの山並みもはっ

松江の街並み



眺望志と交流の象徴

きりと見える。

松江の東、中海の近くに、高い山を意味する嵩山がある。ちなみに中国・河南省には嵩山と呼ばれる五岳の一つの名山がある。

当時の松江高校のキャンパスの周囲は、民家が少しある程度でほかは田んぼだったので、学生の自習寮の丘からの見晴らしはよ

く、和久羅山、桑山とともに嵩山を乙女が仰向けに寝た姿に見立てて、昔から松江の人々は寝佛と呼んでいた。松江高校生はロマンを託してメッチェン山と呼び心のよりどころにし、そのふもとで様々な思いを胸に学園生活をしてきた。

生徒たちにとっては運動に勉強に励んだところ、

青春のすべてを包んでくれた高校生活の崇高な象徴だったのだろう。カルシュにとっても日本での抱負と生徒との交わりの象徴で、この地を愛した彼は嵩山周辺の景色を描くために、画紙集とパステルをもってよく散歩に出かけた。

宍道湖と中海を結ぶ大橋川や近くの神社では何時間

も我を忘れて描画に没頭したとみられる。そうして描かれた絵画もメヒテル宅で数十枚確認することができた。

「嵩山から見た松江と宍道湖」との添え書きの写真からは、カルシュの目を通して当時の松江の様子を推しはかれる興味深い写真だ。ほかにもう一枚の写真をつなぎ合わせた松江市街の写真が何枚か見つかった。

(敬称略)

(東京医科歯科大学院) 教授 若松秀俊

島根・日本

ドイツ人哲学者がみた

4

宍道湖畔

にも霽開気が通じる風光明媚な落ち着いた城下町である。カルシュは幾度となく、軽井沢で見た夕日の美しさと、松江の夕映えの芸術をたたえている。

1925(大正14)年9月に来日したカルシュは松江を中心に各地で撮影しているが、2度目の正月休暇に撮った写真が多く残っている。湖畔の周りを自転車に乗って散策したときに撮



① 宍道湖と大橋川の境の辺りの夕暮れ時
② 松江近辺から見た宍道湖、1927年(いずれも若松秀俊教授提供)



心に映る風景を記録

影したものである。

長女のメヒテルトによれば、父フリッツは普段から散策がとて好きであった。そして、何よりも遠出の旅が好きで、旅先ではその様子を丁寧に記録していたという。当時の旧制

松江高校(現島根大)の生徒も、カルシュが自らの足跡を地図上に描いていたことを記している。今回、見いだした古いアルバムにも

消えかかった読みにくいメモがたくさん残っていた。

「宍道湖と大橋川の境の辺りの夕暮れ時」との添え

書きのある写真は、いまにも色合いをもって鮮やかによみがえるような霽開気がある。他の1枚にはこの地を象徴するように宍道湖の上空にかかる雄大な雲の広

がりが記録されている。

生後1週間で亡くなった長男ゴットフリートの追悼のために後年、袖師ヶ浦から宍道湖を望み、「地蔵」に祈りをささげるカルシュの姿を生徒がみている。

カルシュはこれらのほかにも、宍道湖を撮った写真をたくさん残している。

(敬称略)

(東京医科歯科大学大学院) 教授 若松秀俊

フリッツ・カルシュはドイツから入つてに購入したカメラを持ち出しては、松江周辺の田園の写真を撮っていた。雪深い冬が去って、野には若い草木が風にそよぐ。自然の深い静けさと一体となった自分の姿と、そこで感じた美しさを心の奥の鏡に映し出す。

宍道湖の辺りに出てみた。風に吹き寄せられるかすかな波音とその響き、水底に潜む神々が自分の心によさしく呼びかけてくる。

嫁ヶ島が湖上にたたずむ静かな美しさを近くの農村の風景を目にしたカルシュは、カメラのシャッターを切ったり、画用紙に描写したりするときに、より深い心の平安と満足感を味わったという。

宍道湖に臨む水の都・松江は「東洋のベネチア」。故郷のドイツのドレスデン

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

5

日暮れの中に吸い込まれるように眼前から遠ざかっていく大橋川の様子は、どこか故郷・ドイツのエルベ川のたたずまいに似ている。川は時をのせて流れ、水の都を描き出しながらあたりの景色の移ろいをゆったりと披露する。フリッツ・カルシュは水の芸術を楽しむようにその情景を丁寧に撮影した。

大橋川を行き来する船は、人々の生活の営みとその歴史を押し分ける波を刻みながら揺れている。帆掛け船が往時を語る。写真は漁船であろう。シラウオやアマサギ(ワカサギ)の漁の様子であろうか。他の写真には大橋川に浮かぶ船や沿岸の漁の拠点とみられる人家が見える。

枕蚊帳を逆さにしたような網に魚が入るとこれを引

大橋川のたたずまい

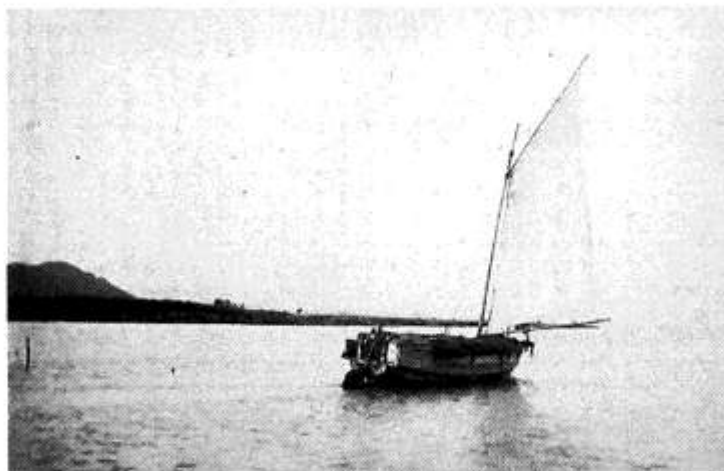
き揚げる。これが四ツ手網を使った漁法で、網は出雲市園町の県立宍道湖自然館ゴビウスに保存されている。この珍しい漁の姿を長女のメヒテルトは子供のころ何度も目にしたといい、「印象深かった」と話している。

大橋川に架かる、松江の南北を結ぶ松江大橋は昔任当時は木製であったが、1

時の移ろい見つめて

937(昭和12)年に現在のものに架け替えられた。カルシュは旧制松江高校の離任時に、時の移り変わりをしみじみと回顧している。

大橋川や朝酌川など河川の合流点の近辺の川沿いに



①大橋川を航行する漁船②大橋川で漁をする人々③いずれも若松秀俊教授提供

行われる。

神々に敬意を払いながら、信頼関係をもち、共に生活するということをカルシュは日本に来て初めて知った。「日本人が他人や異文化に寛容であるのは、このような背景があるのである」と。そんなカルシュの声が聞こえてくるようだ。

は塩櫃島の手間天神社(松江竹矢町)や、朝酌下社とも呼ばれる多賀神社(同市朝酌町)などがある。多賀神社では、神在月に出雲に集う八百万の神々が同市鹿島町の佐太神社で神事を終えた後、立ち寄り直会をするという。この直会を邪魔しないよう、神社では11月25日夕から表と裏の参道にしめ縄を張り、入り口をふさぐ。翌日早朝にしめ縄を外すと、神々はこの地を去り、人々はもとの生活に戻る。そんな譲り合いが

(東京医科歯科大学院) 教授 若松秀俊 (敬称略)

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

⑥

㊦ そりこ舟

㊦ 大海崎川いずれも若松秀俊教授提供

フリッツ・カルシュは日本各地を撮影しているが、県内については、宍道湖、大橋川と並んで、写真をたくさん残しているのが中海である。

ヤマタノオロチ伝説で名高い斐伊川が宍道湖に流れ込み、大橋川に流れを変え、松江を南北に分けながら、中海を経由して美保湾に入る。松江、米子、境港などの街が囲む中海はカルシュにとってどれほど印象深かったことだろう。実際に、この周辺については膨大な数の写真を残している。しかし、様子は今とはずいぶん異なっていた。火山島で、玄武岩からなる大根島は当時は中海に浮かぶ島だった。松江からの人々は中海を通りこの地を経て美保関にかけて美しい景色を眺めながら汽船で行き来していた。現在は、松江市街

中海への誘い

からは大海崎橋などを経て車で自由に出入りできる。筆者を案内してくれたのは竹原敏夫・島根大名菅教授で、カルシュを知る数少ない人物の一人。1968(昭和43)年に旧制松江高校の同窓会がカルシュを日本に招待した際にお世話をしている。

夕日に映える中海や、木立の間に垣間見る中海など、写真のどれからも彼らの美へのセンスがうかがい知れる。1927(昭和2)

写真で知る「美意識」

年10月22日、同高の弁論部で論客だった三宅卓(7期生、文科甲類)らと一緒に訪れた中海への遠足で撮った写真には馬場の様子や大海崎が写っている。

海岸には人家やそりこ舟が並んでいた。カルシュは「Altes Boot」(古き小舟)と呼んで本当の名前は知らなかったよう

だ。この舟はへさきの板が反っていたことから、そう呼ばれるという。左右に揺れながら移動する。古くから底引き漁に使ったモミの木を素材にした舟であ



大根島へは何度か生徒と一緒に遠足に出かけ、その様子を写真に残している。枕木山から見た江島、大根島と中海の景色は絶景で、カルシュが好きなたんの見頃には島内には様々な色の大輪の花が咲き誇る。

(敬称略)
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

7

「松江で過ごし、近隣のたぐいまれな風景に接することができた歳月と、旧制松江高校の同僚教師や生徒たちとのふれあいは、何にも代えがたい、素晴らしいものであった」

フリッツ・カルシュの同校離任時のあいさつの邦訳である。これからもわかるように、彼は日本人々と自然に積極的に入り込んで、その背後の神髄を探ろうとしていた。また、表面上観察できる現象の背後に潜む本質をとらえるために、精神の集中と同時に心の平安が見いだせる奥深い世界を求めていた。ヨーロッパで欠けているのは、この点であるとのことであった。

これは恩師であるドイツの哲学者のニコライ・ハルトマンだけでなく、終生の師とあがめた思想家ルドルフ・シュタイナーも同様に考えていたようだ、と言っ

田園の記憶

ている。さらに秋に田んぼ道を歩いて農夫たちが働くさまを例に挙げ、日本人の勤勉さにも触れている。

「大根の収穫の後で」という添え書きのある写真は収穫時の典型的な農家の様子であろう。大根を軒下で干して保存する様子や稲刈り後に稲穂を乾燥する様子は、ドイツでは見られない珍しい光景であった。とにかく日本人の勤勉さをこん

心癒やす 奥深い世界

などころにも細部にわたって感じていたようだ。

独特の風土に育まれた日本の文化が、後にほかから受け入れたものと調和している。カルシュはそれを見ている。いにしえから続く人々の生業に、しばし深い思

いはせ、日本文化の多様な性に強いあこがれと満足感を味わうことができたようだ。

カルシュが14年間暮らし、た旧奥谷宿舎(松江市奥谷町)の庭ではミカンが158個収穫できたといい、写

真も残っている。「ミカンは当時のヨーロッパではとても珍しかった」と長女のメヒテルトが語ってくれた。

「1926年10月、松江南の古き大名通りのヒトコマ」の添え書きのある写真、



①大根の収穫の後で
②松並木の通りを走る馬車(いずれも若松秀俊教授提供)

江市津田地区)とみられる松並木の街道を馬車が走る光景である。

松並木はもはや見あたらない。貴重な写真で、「よく似た風景はカルシュの生まれ故郷や伯母のフリーデルの住んでいた田舎で見たことがある」とメヒテルトが筆者に語ってくれた。

(東京医科歯科大学院) 若松秀俊 教授 (敬称略)

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

⑧

真山(256㍎)は松江市街の北の法吉町にあり、新山ともいわれる。頂上付近には真山城跡があり、宍道湖から中海まで、広く眺望できる。平安末期ごろに築城されたとの言い伝えもあるが、16世紀半ばの戦国時代には戦略的要所として白鹿城(同町)とともに、毛利氏と尼子氏が激戦を繰り広げた舞台となった。尼子氏再興の中心となった山中鹿介らは1569(永祿12)年に奪い返し反攻の拠点としたのがこの城だが、その後毛利氏との戦いに敗れたという。

メヒテルトは父・フリッツ・カルシュと一緒に何度かこの山にのぼり、その美しさに感動したとのことである。「とにかく、無条件に素晴らしい眺めで、父のたいへんな好みの場所であった」とメヒテルトは筆者に語ってくれた。

ドイツの友人が松江にカ

真山城跡から

ルシュを訪ねてきたときには、出雲大社や枕木山(松江市枕木町)とともに真山に案内するのが常であったという。最近、筆者がメヒテルトと電話で話した際に、彼女が8歳のころ、東京に住んでいたヘニツヒ牧師と3人で真山に登ったことを思い出してくれた。

2人は宗教もしくは人智学についてとても熱心に語り合っていたとのことである。「内容はよく分からなかったが、2人の表情はとても生命感にあふれ、子供心に2人の人物の大きさが印象づけられた」と語っている。

遠く山々、感動写す

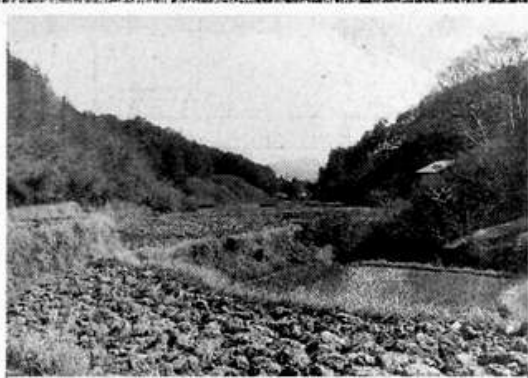
カルシュが撮影した写真のモチーフとアングルは、残した種々の風景画とともに

に、彼の美意識がきわめて優れていたことを物語っている。

カルシュ自身のメモによれば、山あいの田畑を撮影した写真は真山近くの



真山から遠く山々を眺めて—カルシュが2枚の写真をつなげている。若松研究室で接続部を画像処理



真山近くの谷間—いずれも若松秀俊教授提供

谷間のようすで、南に向かって見た景色とみられる。遠くの山を間に挟んだ谷間の段違いの棚田が美しい。また、ほかの写真には真山の頂上から見た宍道湖、大山、和久羅山、西方の大社の山々や北の島根半島の眺望が記録されている。

カメラのレンズを通して島根の美しい景観と向かいあったカルシュ。当時、写真撮影と現像に夢中だった、旧制松江高校(現島根大)の教え子とともに撮影に行き、写真の技術を磨いたのである。

(敬称略)
(東京医科歯科大学院) 教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

⑨

ころ狭しと密生していたよ

うである。メヒテルトによ
るとハスの花の色は純白で
あった。

この辺りを父と手を携えて
よく散歩した。

そんな思い出を筆者に語
っているうちにメヒテルト
には、北堀町の小学校の裏
にあった豆腐屋についての
少女時代の思い出がふとよ
みがえってきたという。豆

も健康食として今も時々食
べている。実は豆腐の味が
忘れられない彼女は、現在
住む米国テネシー州チャタ
ヌーガで、友人から聞き出
した製造法に従って、豆腐
屋で見た様子を思い出した
がら自分で豆腐を作ったこ
ともあると話していた。

北堀小学校をはさんで反
対側には母のお気に入り
の仕立屋があった。浴衣を作
ってもらったといい、唐傘
をさした浴衣姿のメヒテル
トの写真が残っている。

(敬称略)

(東京医科歯科大
大学院教授 若松秀俊)

松江城の周囲をめぐる堀
川は、城や武家屋敷、塩見
縄手などのたゞすまいが楽
しめるだけでなく、小さな
舟に乗り季節によって異な
る風情をゆったりと味わえ
る観光の名所になっている。
水面から見える松江の
街の様子はさながら別世界
のようである。

1927(昭和2)年に
フリッツ・カルシュが堀川
に沿った街並みを撮影した
とみられる写真には、当時
の民家や舟が見えている。
「残念ながら、舟に乗って
カナル(お堀)巡りした
経験がない」とカルシュの
長女のメヒテルトが電話で
語ってくれた。

松江城の東側の堀を写し
たとされる写真には水面を
ほぼ完全に覆ったハスが写
っている。カルシュが残し
た写真を見ると、堀川にと

お堀巡り



①北堀橋と遠くに松江城が見える②城の東側の堀に密生したハス③いずれも若松秀俊教授提供

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

10

湿気が多い雪が積もった日の夕方近い頃であろうか。フリッツ・カルシュが14年間暮らした旧制松江高校(現島根大)の旧奥谷宿舎(松江市奥谷町)に面した通りの雪景色のたゞすまいが何とも美しい。まさに、綿帽子をかぶったようである。奥谷の風情が写真を通じて伝わってくる。

奥谷宿舎の窓から撮った写真は当時、向かい側にあった渡部愛之助宅を写している。渡部は同校の学務を担当し、生徒には何かと頼りにされていたという。後に渡部の2人の息子が同校に入学した。どちらも外国語は英語を中心とする文科甲類を選んだ。

1937(昭和12)年、カルシュの左隣の宿舎に

奥谷の雪景色

住むアメリカ人のウッドマン家が火災になった時には、渡部の長男の忠が右隣に住む桑田武一郎と一緒に、カルシュの家の荷物を自分の庭に運び出したという。

カルシュが奥谷を撮影した写真のなかには大雪により屋根に通常の3倍ほど積もった様子が見られる。このときは生徒が心配して、雪下ろしにわざわざやって

綿帽子風情たっぷり

きたという。そのときの写真も何枚か残っている。

余談になるが、後年、同校の生徒が雨の日に宿舎の窓に向かって「カルシュ先生」と慕って大声で叫んで

①雪に包まれた奥谷の通りの家々
②旧奥谷宿舎の窓から見た雪景色―いずれも若松秀俊教授提供



いたことがあった。長女のメヒテルトには最初は、何が起ったか分からなかったが、彼女は、そんな光景を今も余韻をもって思い出すことがあるという。カル

メヒテルトによると、12月のクリスマスマスのころには奥谷で、よく10センチ以上の雪が積もったという。父や近所の仲良しの友達と一緒に雪だるまをつくっては、その後で、表情を作り替えて楽しんでいたことを今もよく覚えている、と筆者に語ってくれた。(敬称略)

(東京医科歯科大学大学院) 教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

III

① 教え子が撮影したカルシュウ家
② 菊の咲き乱れる庭で遊ぶ飼い犬のボチとヒリイ(いずれも若松秀俊教授提供)

フリッツ・カルシュウが過ごした旧制松江高校(現島根大)の奥谷の官舎(宿舍)の庭には藤棚があり、毎年うす紫色の藤の花が咲き誇った。日本人が花をかんざしにして好んで使ってきたことをカルシュウは長女メヒテルトに語っていたという。

そんな思い出話も彼の生涯を取り上げた拙著「湖畔の夕映え」(文芸社)で触れている。カルシュウ夫妻が1925(大正14)年に来日してから1年余経過した頃、近所に住む同僚で英語を教えていた多田義延の夫人に教えられながら育てた菊が、官舎の庭に見事に咲いた。

官舎の庭



子供の楽しい遊び場

たという。長野県松本市での菊展の写真や、夫妻とメヒテルトと一緒にいろいろな草花や樹木を庭で育てた様子も撮影されている。

官舎では犬を飼っていたので、家族はこの庭を動物園と呼んでいた。メヒテルトの動物好きの起源はこの

頃にあるようである。犬は「ボチ」と「ヒリイ」の2匹。エンメラのお気に入り

カルシュウの教え子で、写真を通して極めて親しい関係だった遠藤捨雄(13期理科乙類)は、カルシュウの自

宅に招待されたときの庭の印象を思い出として語ってくれた。

遠藤の話をきっかけに、筆者はメヒテルトに庭の様子を尋ねてみた。当時、庭には砂場があり、ブランコと一緒に「金魚の池」もあ

遊び場であった。和服姿の子供のブランコに乗った写真が残っている。

この庭ではたくさんミカンを取穫できたといい、たわに実ったミカンの写真も見つかった。残念ながら正確な時期はわからないが、周囲の様子から1937(昭和12)年以前の撮影とみられる。(敬称略)

(東京医科歯科大学院 教授) 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

12

宍道湖は東西に長く、湖岸からの景色が美しい。フリッツ・カルシュが残した写真にはそんな湖岸に映える神社が写っていた。今春、松江を訪ねてその神社が宍道湖大橋の北側の末次公園のそばにある須衛都久神社(松江市西茶町)であることがわかった。

今もその湖畔に位置するが、神社の周辺が現在の様子と変わっている。なかなかその確信がもてなかった。しかし、宍道湖が右手に写った写真の脇に「湖畔の神社」と書いてあったので、これが手がかりになった。万葉仮名で「須衛都久」と記述されている神社の1926年に撮影した印象深い写真をカルシュは残していたのである。

祭神は伊邪那美尊と須佐之男尊で、『出雲国風土記』(733年)にも記載

須衛都久神社

がある。この神社の当時の様子をつかえる貴重な写真である。

「Suet-sugu」と記してあった他の2枚の写真も同じ神社であることが後でわかった。かつて宍道湖の入り口に臨んでいたが、今は水際から少し離れたところにある。しかし、少なくともこの神社が水の恵みか、水難よけに関係がある海の神、住吉さまとの関係が想像される。

美しい神社 変容確認

実際に、この地は舟や筏で運んだ石材の陸揚げや参拝人や行商人の舟着場としてにぎわったところだとい

う。近世では松平家との関係が深く、手厚く保護され



①神社の写真には「Suet-sugu」との説明書きが残っていた
②湖畔の神社―いずれも若松秀俊教授提供

ていた。境内の中にはいろいろと狛犬が見られ、興味深い。境内の隅に残っている高石灯籠は写真のように美しい姿であったことがわ

かった。ここにもカルシュの美意識が反映されてい

ていた。境内の中にはいろいろと狛犬が見られ、興味深い。境内の隅に残っている高石灯籠は写真のように美しい姿であったことがわ

この対比が困難である。明治から大正初期にかけて、変遷の経緯の説明を宮司から聞いたたり、神社に保存されている古い写真などを見たりして、この美しい神社の段階的な変化を推測しながら変容を確認することができた。

（敬称略）
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

13

ドイツではそれぞれの地方に独特の文化が長い間育まれてきた。日本でもそうであった。松江も他の地方の都市と同様にこの地で独自の文化圏を維持してきた。

フリッツ・カルシュは、藩主松平家の菩提寺として長く親しまれてきた月照寺(松江市外中原町)を撮影した写真を残している。寺は藩祖松平直政が生母・月照院の靈牌の安置所として、1664(寛文4)年に、洞雲寺を再興して月照寺となし、宗派を禅宗から浄土宗に改めたことが知られている。

閑静な境内には四季折々の花が咲き、とくに6月中旬からは、境内に約3万本のアジサイが咲き乱れる。官舎からは若干距離があったが、この寺院での散策の中でカルシュがもろもろの

月照寺の靈廟

思案をしたことは家族の証言からも十分に推測できる。

6代藩主の宗行の廟所(墓)の前にある寿蔵碑の土台になっている石の大亀は、夜の松江の街中を散歩したとの伝説が残っている。大亀を撮影した写真は、中国古来の亀(玄武)に関する宇宙観に、哲学者としてのカルシュの関心が

日本の死生観に関心

投影されたものであろう。長女メヒテルトはこの説明を最初は理解できなかったようだが、私との電話でのやりとりで合点がいったとのことである。

玄武は四方をつかさどる天の四神のうち北方を、すなわち天を支え地を守護す



1927年5月15日 松江 大名の墓
① 寿蔵碑の土台となっている大亀(いずれも若松秀俊教授提供)

る神で、姿はもと亀そのものであった。

文化人としての不昧公への尊敬の念とあわせて、ヨーロッパと全く趣が異なり死して自然にかえる日本人の死生観が彼にやすらぎを与えたに違いない。彼は月照寺を1927(昭和2)

カルシュにとって印象深い7代目藩主の不昧公の靈廟の正面は、彼が写真とともに丁寧に描いたパステル画が、ドイツのマールブルク在住の次女のフリーデルンのもとに保管されている。

年5月15日に初めて訪問し

ている。「大名の墓」とのメモも残っている。

茶人としての不昧公の哲学には感じることも多かったようで、縁深き茶室「菅田庵」には生徒と共に何度か訪ねている。このことは、戦後にマールブルクに住んでいたカルシュ夫妻を生徒が訪問した時の思い出の記録として訪問帳に記されている。

(東京医科歯科大学院) 教授 若松秀俊 (敬称略)

ドイツ人哲学者がみた

鳥根・日本

14

●1928年7月2日 神魂神社

①神魂神社への上り道②いずれも若松秀俊教授提供

フリッツ・カルシュが神魂神社(松江市大庭町)を訪れたのは1928(昭和3)年7月2日。長女メヒテルトが生まれてすでにほぼ半年が過ぎたころのことである。

杉並木の道から呑みした自然石の急な石段を上ったところに鎮座するこの神社の本殿は、日本最古の建築様式である「大社造」で、1583(天正11)年の再建とされる。現存する大社造の本殿のなかでは最古のもので、1952(昭和27)年に国宝に指定された。現在の高床式の本殿は、全国の神社の建築の原形をなす貴重な文化財とされている。

本殿の左手にある貴布禰・稲荷の両神社の本殿は、柿葺きの二間社流造。類例のない珍しい形式とされ、国重要文化財に指定されている。

神魂神社



日本最古の建築様式

神社の名については諸説あるが、宮中の御神鏡の八咫鏡をまつる賢所と同様に神霊の鎮座する「神坐所」、すなわち「かみすどころ」がカンマス、カモスになったともいわれる。また、二柱の御祭神の天地創造の古事によるカミムスビ、すなわち縁結びの神に由来した古代の発音に起

源があるともいわれている。

10月11日から同18日まで、同神社に滞在する神々の集合目標として亀甲の中に「有」の字で神在月をかたどったものが御神紋と同社に伝えられている。この社の主祭神は、伊弉冉尊なので外形内部共に出雲大社と異なり女造になっている。

同じ日にカルシュは素戔嗚尊を祭神とする熊野大社(松江市八雲町)を訪れて

いる。日本の神々は農業神が基本であり、この神社は出雲大社との関係も深く毎年10月15日に出雲大社から宮司が訪れ、火鏡白と火鏡杵を送り出す鎮火祭が行われている。

「神在月になせ神々がこの地に集まらなければならぬのか」「有力な神々がなぜここでまつられているのか」。カルシュはそんなことを考えたに違いない。

「それには、神代の伝説以上の様々な日本の勢力争いと文化交流に関する歴史の成り立ちが投影されている」。そう言っている彼の声が聞こえるようである。

(敬称略)

東京医科歯科大学大学院
教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

15

フリッツ・カルシュの写真のなかには、松江市奥谷町にある春日神社の当時の懐かしい姿が何枚も残っている。その中であって、長女メヒテルトにとって今も深く印象に残っているのが鳥居にうずたかく積もった雪の光景だった。崩れずにどのくらい高く積もるのかを子供心にも考えたという。

神社の雪景色はとにかく美しく、近所では最も好きな場所のひとつであった。雪に埋もれた不思議な様相の狛犬が神社の守り神だと後で知った。写真はメヒテルトが生まれる前のものである。冬が去って、また巡ってくるまで、少女の彼女は午後ひとときを友達とここで過ごしたという。

この神社とならんで、万寿寺(奥谷町)や桐岳寺(同)、千手院(石橋町)、

春日神社の雪と花

月照寺(外中原町)は何にも代え難い少女時代の心のふるさとであった。万寿寺の和尚とは大変親しい間柄であったという。父フリッツと1968(昭和43)年に再来日で訪れたときに、かの和尚との親密な仲に、周囲の人々が驚いた。それもそのはずで、子供の頃、父娘と何度も散歩に来ては、和尚と語り合ったことがあったからである。

春には、春日神社の境内



上 春日山の雪景色
下 春日神社に咲くツツジ いずれも若松秀俊教授提供



巡る季節少女の心に

に所狭しとツツジが見事に咲き乱れた。左隣の宿舎に住むアメリカ人のウッドマン家のエレナは「ツツジ」は発音しにくいから、後年これを思い出して「チチジ」とよんでいたとい

う。

ところで、教室で出席をとるときカルシュは生徒の「辻久一」の「ツツジ」を言

いにくかったようだ、9期文科乙類の白石磷(故人)が記録に残している。

白石はカルシュの当時の教え子を紹介してくれるなど

調査の功労者である。彼の存在と働きをなくしては、筆者の関連調査はほとんど不可能であった。カルシュの教え子の一人

であった辻は、戦中に上海を拠点にした映画会社にかわり、国内では、黒沢明監督らと映画製作に従事したこともある。筆者がそうしたことも調べるなかで、改めてカルシュとその教え子の関係を偲ぶことができ

た。
(東京医科歯科大学院) 敬称略
教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

16

中海に浮かぶ大根島はわずかに標高40mほどのきわめて平坦な火山島である。江島とともに合併によって松江市八東町になった。現在は、堤防道路と江島大橋で陸続きになっているが、フリッツ・カルシュが松江で過ごした大正から昭和にかけては、汽船が行き来していた。

大根島の溶岩隧道「幽鬼洞」は国指定の特別天然記念物に、第2溶岩隧道の「竜溪洞」も国の天然記念物に指定されている。カルシュはここに、生徒とともにしばしば遠足で訪れ、洞穴の入り口の前での記念写真も残している。

手前に木製の舟が見える写真は、大根島北岸の旧二子村で撮影したという。島の西側の船着き場とみられる別の写真には漁具も写っており、この辺りの漁師の

大根島にて

生活が偲ばれる。

ところでドイツとスイスの国境にある風光明媚なポードン湖畔では、詩人ヘルマン・ヘッセと旧制松江高校(現・島根大)の藤野義夫教授(ドイツ語)とが親交を深めた。この美しい湖の中にあるマイナウ島は、中海に浮かぶ二つの島との対比を筆者に思い起こさせた。マイナウ島は温暖な気候で、様々な花の咲く島の様子がまぶたの裏に鮮明によみがえる。35年前

古くからポタン栽培

にドイツ学術交流会の奨学生として留学していたころの筆者の旅の思い出である。

ポードン湖畔のリンダウには、カルシュの妻エンメラの親類が住んでいた。カ



①大根島の牡丹園
②島の北岸の船着き場 二子村(現・松江市八東町)



③いずれも若松秀俊教授提供

ルシュが1931(昭和6)年に一時的に帰国した際、長女メヒテルが母方の祖父母とブランコ遊びをしている写真も見つかった。

大根島は「出雲国風土

記」(733年)に蛸鱒島という名前で記載されており、太根島、そして大根島と変化して今に至ったとも伝えられている。島の土質がポタンにあって300

0年ほど前から栽培が始ま

ったとされる。

カルシュはキクやアジサイ、ツツジとともにポタンがとても好きで、当時の大根島の牡丹園の様子をうかがえる写真も数枚残している。カラー写真でないのが何とも残念である。

(東京医科歯科大学 院教授 若松秀俊)

(敬称略)

ドイツ人哲学者がみた

鳥根・日本

17

松江城の北側には万寿寺(松江市奥谷町)や桐岳寺(同)がある。城の南西には天倫寺(堂形町)があり、城下への入り口に寺院を配置した形になっている。仏教により国を鎮め、護ることを願ったの風水の配慮からであろうか。奥谷町、春日町、東奥谷町の一带は松江市が景勝を守るため万寿寺・桐岳寺緑地保全区域に指定している。

旧制松江高校(現鳥根大)の官舎(奥谷町)に近い龍洲山桐岳寺は曹洞宗の寺院である。カルシユの長女メヒテルトが6歳だったころ、たった一人で桐岳寺の境内を歩いていた。すると見るからに優しそうな和尚さんが声を掛けてきた。他に2人のお坊さんが一緒

万寿寺のあたり

にそばに寄ってきた。当時は、外国人が珍しかったからであろう。両親のこと、お国のことをいろいろと聞かれたという。

メヒテルトによると、お堂の縁側に案内されるとお茶が出された。でもお菓子はなかったという。「本当は苦いお茶ではなく、甘いお菓子が欲しかったのに。でも一人前に扱ってくれたことがうれしかった」と当時を振り返った。

心を浮き浮きさせながら

家族の憩い・安全の場

夕暮れに奥谷の官舎に戻った彼女がドアを開けると、家には母の怖い顔が待っていた。とても厳しくしか

られた。どこへ行ったか分からなくなっていた娘を心配しての母の愛情であった。

ところで、奥谷の通りの行き止まりには、庭園のある万寿寺がある。万寿寺は臨済宗妙心寺派の禅寺で



●万寿寺の仏様
●万寿寺から南方向を見て
||いずれも若松秀俊教授提
供

ある。カルシユは自らの学問的立場からも禅について関心が深く、付近の禅寺だけでなく、足を延ばして福井県の永平寺をも訪れ、多くの写真を残している。

万寿寺はカルシユ一家の憩いの場であり、幼いメヒテルトの自由で安全な活動の場であった。何よりもメヒテルトが、夕刻に近い頃、近所の子と連れだってカラスに会いに行く子どもだけが知っている秘密の場所でもあった。とにかく、この辺りは彼女にとって、松江のすべてともいえるべき、ふるさとそのものであった。

メヒテルトは筆者に松江での思い出を話しそうに語ってくれた。

(敬称略)
(東京医科歯科大学院)
教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

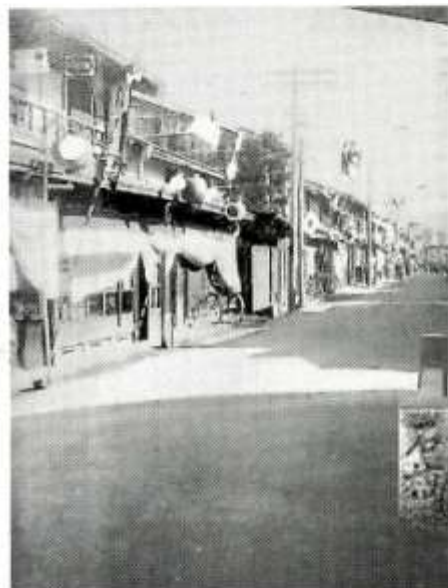
18

松江城から北東へ足を延ばす。北堀町を抜け万寿寺(松江市奥谷町)へと続く商店が並ぶ石橋町の通りを右に曲がると、そば屋の向かい側にちよつと見落としそうな小さな橋を見つけた。昔は石造りだったという。

橋が架かっているのは奥谷川であったが、今ではすっかり暗渠(あんけい)になっている。橋の下流側には欄干が残っており、辛うじて橋と分かる。これがフリッツ・カルシュが残した写真に写っている「石橋」と刻まれた石の橋だ。写真の石橋町の建物には、昭和天皇即位の「御大典」の特別な装飾が施されている。撮影の日付は、1928(昭和3)年11月10日となっている。

江戸時代の地誌には石橋

石橋のあたり



様子変わった表通り

町の入り口の橋の説明が載っている。当時の橋は木製で、石の橋は珍しかった。近くの北堀川の橋は木板を並べて作られた。ここは、城下町から美保関に向かう幹線道路沿いの町であった。

た。良質の水がこの地の醸造の伝統を今日まで支えている。石橋から千手院(石橋町)に行く途中に、老舗の醤油店がある。そこのおかみさんがドイツ・ザールブリュッケン出身の森山エミ(54)で、カルシュの長女のメヒテルトは今でもクリスマスカードを交換しているという。醤油店の大きな土蔵の側には、いつもうなり声(振動)をあげていた機械がある。

って、少女だったメヒテルトはとても怖かったという。カルシュは、同じ年の11月14日であった「雙行列」の祭典の写真をたくさん残している。直径1尺を超え、響と呼ばれる大太鼓を屋根つきの山車屋台に載せ、松江市中心部を練り歩く。写真は、行列が石橋を通過する場面、右端が石橋であると添え書きが残されている。

は、すっかり様子を変えてしまったが、裏通りには今なお昔の面影が見られるという。中学生の時に奥谷町に移りこいで育ち、今もこの地に住む竹原敏夫・島根大名普教授が子どものころを思い出しながら、目を細めて筆者に語ってくれた。

(東京医科歯科大 大学院教授 若松秀俊) (敬称略)

●昭和天皇即位の「御大典」の装飾が施された通りと、石橋(松江市) 1928年11月10日(昭和3)年11月14日 行列 1928

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

19

「こんなに静かで美しいところで自分が育ったのは、運がとてよよかったからだ」

昨年8月、米国・テネシ州のチャタヌーガに、フリッツ・カルシュの長女・メヒテルトを訪ねたとき、彼女は松江での生活を振り返ってこう語った。

大好きな千手院(松江石橋町)の境内は、四季折々の風情を醸し出してくれる景勝地である。ここからは松江城と眼下に広がる城下町のたえずまいを一望できる。彼女にとって、このほかお気に入りであった。

写真の千手院のしだれ桜は現在樹齢200年以上といわれる老巨木で、松江市の天然記念物に指定されている。枝に沿って一斉に開花する桜を一目見ようと、

千手院



お気に入りへの景勝地

毎年春には多くの見物人が訪れる。80年前のこの様子をカルシュが撮影している。

堀尾吉晴が松江で1660年(慶長12)年に城を築く

際、本丸の北東に鬼門封じのために広瀬町から移築した寺が千手院である。高野山真言宗の古刹で、1678(延宝6)年の城下の大火などで焼失した記録が残っているが、千手院によると1828(文政11)年に再建されたのが現在の本堂、不動堂という。

カルシュが神社仏閣を撮影した写真を大量に見たとき、メヒテルトから千手院の不動明王像について

質問を受けた。その形相は子供心にとても恐ろしく異様に感じたという。また、写真を整理しながら、「松江の光景を思い出し、父母やその親類、そして慈しんでくれた祖父母の愛をこんなにゆっくりと偲んだことはなかった」といつていた。

彼女自身は紛れもないドイツ人なのに日本で生まれて、戦後混乱のさなか米国に渡ったので、ドイツ国籍

を取得しなかった。それに夫ヘルベルトもドイツ人なのに、子供のエドワードとエリザベートにはドイツ語を全く教えなかったことをとて後悔しているという。それゆえ、彼女は、子供や孫に自らの故郷の日本を語るとともに父フリッツや母エンメラについて折に触れて語り伝えているという。

(敬称略)
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊

①千手院 桜の花

②千手院の不動像 いろいろも若松秀俊教授提供

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

20

世界に誇る美、強調

「**II**」と呼んでいたことを思

い出した、と彼女は話していた。実際は石造りの不動明王で、仏法の守護としてがけの上に鎮座している。

平和でのかな風景に見入った。その印象を1939(昭和14)年春、松江高校の離任時に生徒らにはっきりと語っている。

たことが幾度となくあった。とカルシュが松江高校の生徒や自分の家族に繰り返し語っていたことが伝わっている。

事実、松江を訪れるドイツの友人を真山(同市法吉町周辺)とともに必ずこの地へ案内した。それがいつわりのない彼の日本の自然の美しさに対する認識であった。

その証しとして残したものの一つが1934(昭和9)年の秋に、カルシュが中海のほとりの本庄村(現・同市本庄町)を枕木山から俯瞰し、撮影した写真である。

あまりにも知られていない景色の美しさのことなのである」と明言。眼前に展開する風景は世界に誇るべき美しさであると周囲にいつも強調していたのである。

（敬称略）
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊

松江の北東に位置する風光明媚な枕木山(標高456㍎)は、松江城の鬼門の方向にあたる。この頂上を目指してメヒテルトら一行は左手に石壁を見ながら、ゆっくりと石畳を登った。頂上には華藏寺(松江市枕木町)があつて、そこでしばし休憩をとった。

枕木山から



●1934年秋、枕木山から中海そばの本庄を望む
枕木山の「ほとけさん」いずれも若松秀俊教授提供

寺に向かう山道の途中にある、大きな雨ざらしの石像を改めて目をこらして見つけた。

カルシュは石像を撮影した写真を残しており、速い

昔自分と一緒にこれを見ながら「Hotokesa

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

21

南側に宍道湖と中海を抱え、北側は荒海の日本海に面して東西に広がる島根半島は、フリッツ・カルシュが日本の美しさに感動した所である。

カルシュは、松江市鹿島町から西長江町にまたがり、「出雲国風土記」(733年)に神名火山と記されている朝日山(標高3423)からの光景をたくさんカメラに収めている。山頂まで険しい小径が続くが、手すりを頼りに石段を登ると金宝山朝日寺に到着する。

参拝し、周囲を散策すると弘法大師像が立っているのが見える。カルシュは、来日後間もない1926(昭和元)年にこの辺りを訪れている。山頂からの眺めは絶景で、眼下には宍道湖、東は中海、大山、西に

朝日山から

出雲平野が展望できる。北東に目をやると隠岐島が望める。

カルシュは、妻のエンメラや長女のメヒテルトの体調がいまひとつ思わしくなかった1935(昭和10)年当時、家族とは一緒に登山はできなかったようだが、ドイツ語で心おきなく話せる旧制松江高校(現・島根大)の同僚の高畑喜市教授の誘いを受けて朝日山だけでなく、方々に出掛けたという。

心癒やす絶景広がる

朝日山のふもと佐陀川のはとりに、佐太神社が鎮座する。「延喜式」にも記されている神社で、出雲大社、日御碕神社とともに出

雲三大社と称されていた。山に登ると、自然の美しさと神々の荘厳さが心を清らかにしてくれるように感じた。ここは学問を通し

た、カルシュの人生観と自然観を自らの感性からも確信できるような心休まる絶好の場所であった。朝日山から望んだ日本海



①朝日山の頂上から恵曇(松江市鹿島町)の方向を望む②朝日山の頂上から見た松江の南西の風景③いずれも若松秀俊教授提供



の海岸は出入りが多く、西は日御碕、東は地蔵崎まで続く。この美しさの広がりや印象をカルシュは何度も語っていたといわれ、娘のメヒテルトの心にも長く留まっている。

(東京医科歯科大学院) 若松秀俊 教授 (敬称略)

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

22

旧制松江高校(現・島根大)の雪を抱いた正門には何ともいえない奥ゆかしさがある。東側に広々とした水田を望む校舎となす調和が美しい。フリッツ・カルシュの手でそんな風景を切り取った写真がたくさん残されている。これらはカルシュがすっかり学校生活に慣れた1927(昭和2)年12月撮影のメモが記されている。

松江高校ではカルシュはドイツ語の会話はもちろん、ドイツ文学も担当科目としていたが、時には生徒の求めに応じて講義だけでなく、ドイツ人の生活ぶりを得意の挿絵を織りませて詳しく披露した。教え子の一人の宮田正信(9期文科乙類)が、当時のノートを筆者に見せながら、その情景を語ってくれた。この話を聞いて、筆者は

旧制松江高校

小学生の頃の授業の様子を思い出した。教師が児童の要求に応じて、日本昔話やアラビアンナイト物語をしたあとに、その情景を個々の児童が想像で絵に描いて表現した。よく描けた絵をみんなで選んで、分担して描きなおし、一枚の大きな絵をつくった。そんな思い出が残っている。それと相通じること



異文化、生徒に届ける

ルシュが行い、異文化の認識の重要性を生徒に教え、己の教育法も検証しようとしたようだ。彼の思いと心情の波がすべて生徒の胸に届き、知識と共に響き渡る。

カルシュにとって生徒は、オーストリア出身の哲学者シュタイナーを源流とする自分の教育理論を実践する格好の対象でもあった。しかし、ドイツ本国で授業に絵画など芸術的な要素を採り入れるシュタイナー教育が禁止されたため、残念ながら中断せざるを得なかった。

長女メヒテルトに対しては散歩に連れ出しては、ゆったりとシュタイナー教育の概念を繰り返し伝えることができた。妻エンメラはドイツ人として必要な知識や行動を日常の対話の中で教えた。そんな日々をメヒテルトは筆者に語ってくれた。とはいえ、彼女は、当時なぜ自分が近所の仲良しと同様に学校に行けないのか、どうにも合点がいかなかったという。

① 嵩山と枕木山を背景にした雪の中の旧制松江高校の正門 ② 旧制松江高校の東を望む川 ③ 若松秀俊教授提供

(東京医科大学大学院) 若松秀俊 教授 (敬称略)

ドイツ人哲学者がみた

島根、日本

23

大正天皇の崩御から約1年後の1927(昭和2)年12月、フリッツ・カルシユ夫妻は日本での2度目のクリスマスを迎えた。ドイツの家族から届いたクリスマスカードが旧制松江高校(現・島根大)の官舎の部屋のテーブルに置かれていた写真や明かりのともったクリスマスツリーの全景の写真が残っている。

神父とお祈りを済ませて官舎に帰宅した夫妻がゆったりとソファに座り、遠く故郷の家族に思いをよせ、クリスマスソングを口ずさみながら、2人だけで聖なる夜を過ごしたことが想像される。

筆者が35年前にドイツに留学していたころ、クリスマス用品で有名なマルクト(市場)が開かれるニュルンベルクに近いエルランゲンでのごとであった。大学

官舎のクリスマス

の医学部の同僚だったドイツ人のリードレル博士とアメリカ人ヤング教授のそれぞれの家庭のクリスマスに招かれた。居住していたエルランゲンの落ち着いた街の様子はもちろんのこと、カルシユの調査に協力してくれた旧友アンドレアス・シュティーフとともに当時のプラハ(チェコ)を訪れた時のクリスマスの街の光

遠く故郷の家族思い

景も強く印象に残っている。

とここで、27年のクリスマスは初めての子を心待ちにしていたカルシユ夫妻にとって喜びの日々であった。この時期は長女メヒテルトが生まれる約2か月前で、近所の人々か



らも前祝いが届いていた様子が写真からもうかがえる。

翌28年に撮影した写真には生後約10カ月のメヒテルトのために両親が特別に用意した人形が飾られている。これがきっかけになっ

て、父フリッツはメヒテルトに数多くの人形を用意するようになったという。

02年の春、筆者が米国テネシー州チャタヌーガの彼女の自宅を初めて訪ねた際、2階の部屋の飾り棚にたくさんの人形が整然と飾られているのを見た。それだ

①1927年の官舎の部屋のクリスマスの飾り。メヒテルトが生まれる約2か月前②1928年のクリスマスの装飾③いずれも若松秀俊教授提供

けでなく、ソファに大きな人形が並んで行儀良くお座りしている様子も目にした。

(敬称略)
(東京医科歯科大学院) 教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

24

来日から問もないころのフリッツ・カルシュの近所づき合いの相手は、おもに旧制松江高校(現・島根大)の同僚で、英語担当の多田義延教授夫妻であった。深い交流を示すエピソードとして、1935(昭和10)年に生まれた長男ゴットフリートに、カルシュは多田教授の名である「Yoshinobu」をミドルネームに選んだことがあげられる。

1枚目の写真は、多田教授宅を訪れたとき、庭で撮影した和服姿のカルシュ夫妻である。日本の心を知るためにもカルシュは和服を好み、妻のエンメラも和服をいつまでも大事にしていた。ドイツ・マールブルク在住の次女フリーデルンは、母が自宅のタンスに良

親しい友と

い状態で和服を保存していたのを覚えていた。写真の添え書きや長女メヒテルトからの伝聞によると、カルシュ夫妻は多田教授夫妻と一緒に、加賀浦、美保関、東尋坊など多くの景勝地を訪れたことがわかっている。多田教授は残念ながら、カルシュと知己を得てから約2年後の1927(昭和2)年10月9日夕刻に急逝した。

個性重視し深い交流

カルシュは、漢字や仮名を毛筆で美しく書いていたという。実際に「ニーチェの言葉」をドイツ語のままではあるが、毛筆で残している。

「汝の心から『英雄の氣』を失うことなかれ。『氣高き大望』を汝の胸に抱き続けよ。」(「四ツ手に網の記憶」、筆者著作より)。

これは、俳人前田貞明がカルシュから贈られ、現在、子息の俊明が所有している色紙の翻訳である。カルシュのこうした言葉を常に耳にしていたのが教



④多田教授宅でのカルシュ夫妻⑤自宅での多田教授Ⅱ写真はいずれも1928年撮影、若松秀俊教授提供

え子で、微生物病學に大きな業績を残し、後に「日本のジェンナー」と呼ばれた奥野良臣(14期理科乙類)だった。奥野はドイツ語の論文が重要な先端的役割を果たしていた当時を振り返り、教えてもらったドイツ語の学術論文で、大きな研究成果をあげることができた、と筆者に感慨深げに語ってくれた。

奥野は同時に、「カルシュからの人生哲學の教示は、後の研究に大きな影響があった」と話していた。松江高校での教育は、生徒を自然な形で専門の道に誘導し、画一的でなく個性を重視することであった。そんな中で、人の優しさや思いやりを授けてくれたのがカルシュだったという。

(敬称略)
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

25

旧制松江高校(現・島根大)に近い松江市西川津町に楽山がある。山というよりは丘のようで、今はテニスコートや弁天池を中心にした自然林の散策路が整備され、楽山公園と呼ばれている。

2代藩主の松平綱隆が江戸時代初期の寛文年間(1701-1716)に、小高い丘をなす山を庭園にした。別荘地として茶屋も設けられ、綱隆はこの地に天満宮や稲荷神社などを設け、境内は神域として管理していたが、祭りには一般の人々に開放したと伝えられる。

7代藩主の治郷(不昧)の茶会もここで開かれたという。ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の随筆

楽山公園

にも登場する推慮神社もここにあり、お祭りは参道に茶屋、そば、甘酒などの店と人々でにぎわったという。

現在の公園は市民の憩いの場である。弁天池に群生するスイレンは、自然に増えたもので、池の総面積の8割を占めている。周囲の遊歩道は、落ち着いた雰囲気、初夏には次々と咲く白やピンクの花が池を覆

四季折々、散策楽しむ

いつくす。その様子を眺めては、カルシユは一人で楽しんで、また思索にふけっていたという。



◎楽山の頂上付近◎楽山の寺院川いすれも若松秀俊教授提供

界の一部から全体を連想させる、東洋的な感性が見いだせるからである。

事実、カルシユは折に触れて収集していた浮世絵とモネの発想の共通性を哲学者として称賛していた。

ここは旧制松江高校に近いこともあって、カルシユは生徒たちに囲まれて、時にはやや哲学的な会話をした。しかし、よもやま話がほとんどで、ドイツ語の練習も兼ねていたという。

こうした気楽なおしゃべりが生徒の心の弾みを誘い、そして時にはややうるさくはしゃぎながら散策を楽しんだことが、当時のカルシユの生徒らによって語り伝えられている。

(敬称略)
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

鳥根・日本

26

⑤生徒らによる祝賀行列⑥松江市北堀町あたり(1928年11月10日) ⑦いずれも若松秀俊教授提供

大正天皇が1926(大正15)年12月25日に崩御された。皇太子の裕仁親王が皇位継承し、昭和が始まった。フリッツ・カルシュはこの時期に哀悼の半旗を掲げて喪に服している近隣の家の様子を写真に残している。

それから2年後の1928(昭和3)年11月10日に、新しい天皇の皇位継承を国内外に公式に宣言する「即位の礼」が京都御所で催された。即位の礼当日は外国使節を含む約2300人の参列者があった。新天皇がその年の新収穫の穀物を神に供え共に食する大嘗祭は、即位の礼に引き続い

御大典のとき

て、1928年11月14、15日に行われた。

即位の礼と大嘗祭、これら二つの儀礼「御大典」を祝う一般市民の提灯行列や旗行列が国家的な行事として各地で盛大に催された。

松江でも同様であったが、このときは、例年11月3日の天長節に行われていた警行列が、御大典にあわせて、11月14日に行われた。

飾り立てられた商店街や広場では町中の人々とともに高校生らの行う祝賀行列や祝賀会が盛大に執り行われた。国旗をもって、国をあげて新天皇の即位を祝った。



カルシュにとって日の丸には1911(明治44)年にドイツのドレスデンで催された国際衛生博覧会以来、日本に対する自分の気

持ちが凝縮されていた。彼は一連の儀礼を「戴冠式、御大典、太鼓祭」と呼び、メモにも「テンノウヘイカ・パンザイ！」などとローマ字で記しており、これらの祭典の意味を十分に理解していた。(敬称略)

(東京医科歯科大学院 教授) 若松秀俊

一連の儀礼十分理解

ドイツ人哲学者がみた

鳥根、日本

27

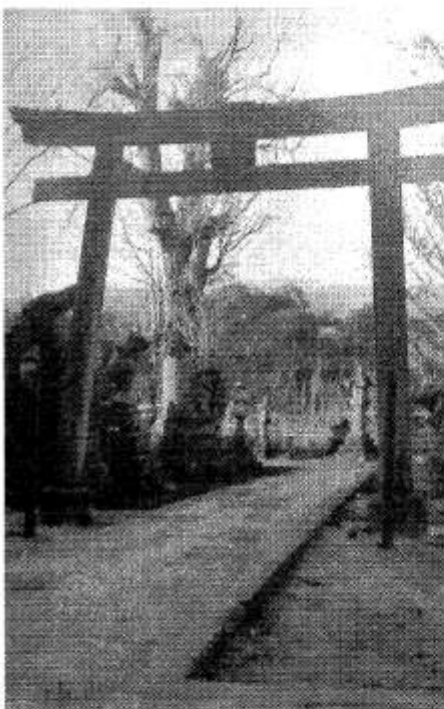
●城のそば、稲荷神社の鳥居
 ①松江の神様、中海への旅程
 1929年5月11日
 若松秀俊教授提供

松江城がある城山公園(松江市殿町)には、ソメイヨシノ、ヤマザクラをはじめ、400本にも達するほどの桜が春には見事な様相を見せてくれる。この周回は堀川遊覧船が運航しており、辺りには見どころが多い。

松江城北の丸の北側に東屋が設けられた鎮守の森の遊歩道を行くと、赤い鳥居が見えて、城山稲荷神社(同町)の参道へ続く。フリッツ・カルシュはその様子を撮影した写真を残している。

城山稲荷神社は、藩主松平直政が創建した松江藩の守護神とされている。名工といわれる小林如泥作の木彫りの神狐などを社蔵としており、大小とりまぜて、1千体近くもある狐狐(石狐)にはラファディオ・ハーン(小泉八雲)も驚嘆

城山稲荷神社



祭りにも大きな興味

し、称賛したという。

城の二の丸にある白い木造の洋館「興雲閣」には、松江の歴史を物語る写真が展示されており、ここでカルシュの松江での事跡が05年に約半年にわたって紹介展示された。さらに県庁へ抜ける石段をおりて

右手には、ツバキやウメがその時期になると美しく咲き誇り、花の心を楽しめる。

ところで、城山稲荷神社の式年神幸祭「ホーランエンヤ」が5月16日に、12年ぶりに開催される。松江が誇る船神事の一つで、同神

社と東出雲町出雲郷の阿太加夜神社などが舞台。360年ほど前から続けられており、城山稲荷神社のご神霊を阿太加夜神社まで船で運び、五穀豊穣を祈願したのが始まりとされる。

り出し、「ホーランエンヤ」の掛け声とともに、權伝馬船の上で踊りが披露される。本来、松江城内堀からこぎ出していたが、堀川の水深が浅くなり、出発場所が変わった。

カルシュは日本の祭りにも大きな興味を抱き、ホーランエンヤの光景を夢中になって撮影している。



(東京医科歯科大学院) 若松秀俊(敬称略)

ドイツ人哲学者がみた

鳥根・日本

28

松江の代表的な祭りに鑿行列がある。フリッツ・カルシュは「ドラムフェスティバル」と呼んで、その記録を写真に残している。

この祭礼は「左義長」という平安時代ごろから行われてきた正月行事がもとといわれる。出雲地方では歳徳神を祭り、鑿と呼ばれる太鼓をたたいて、豊作と家内安全を祈願していた。1915(大正4)年、大正天皇の御大典の際には鑿行列や宮行列が松江市内に練り出した。

鑿の直径は大きいものは2尺近い。これを山車に2、3基載せ、太鼓をたたきながら、他の山車とともに街中を練り歩く。鑿行列は明治時代からは11月3日の天長節に行う祭礼であった。戦後は原則、同日の文化の日だったが、06年からは10月の第3日曜日に開催されている。

鑿行列



① 鑿と呼ばれる大太鼓をたたく人たち
② 昭和天皇の御大典記念の宮行列―いずれも若松秀俊教授提供



華やかな祭り 克明に

カルシュが旧制松江高校(現・鳥根大)に赴任してまもなく、元号は昭和に変わり、さらに昭和天皇の即位の式典が1928(昭和3)年に催された。このときの鑿行列は御大典(大嘗祭)の祝賀と重なり、宮行列もあって町中練出の催し

であった。そんな華やかな町中の大通りに、カメラを構えるカルシュの姿があった。ビデオがなかったこの時代にカルシュは、石橋町や塩見繩手の一角から連続的に行列の流れを克明にメラに収めている。

幸雄・松江市鑿行列保存会会長によれば、元来、左義長行事で太鼓をたたき、歳徳神を担ぎ歩く際に祝い唄がうたわれたという。この行進を「宮練り」といっており、皇室の慶事や特別な記念など限られた場合にのみ行われた。

下の写真は、御大典記念の宮行列で、撮影した場所は当時、白濁本町にあった山陰貯蓄銀行の付近である。

鑿行列は、太鼓を庫におさめ、直会を済ませ終わりとするが、今も締めくくりに祝い唄を添える町内もある。こうして、地域社会に強い連帯感が培われるとのことである。(敬称略)
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

鳥根、日本

29

絢爛 80年前の船神事

といわれると、松江市や県を折願するこの船神事は、は紹介している。江戸時代初期に、城山稲荷神社のご神霊を阿太加夜神社に運び、豊作を祈願したのが起源とされ、その後、1808(文化5)年の神幸祭の

中心に色鮮やかな旗、轆をなびかせた、さながら豪華絢爛な時代絵巻のようであった。カルシュが見た1929年の船団は、松江城内堀の乙部灘から出ていたが、今では見られない。80年前のカルシュの写真はその様子を見事に再現してくる。

フリッツ・カルシュには、何といっても祭りの様相がとて珍しかった。それもこんなに大規模な祭りはただ目を見張るばかりの驚きであった。大船団が大橋川から中海に向けて繰り出しながら船頭とともに、踊りが権伝馬船の上で披露された。

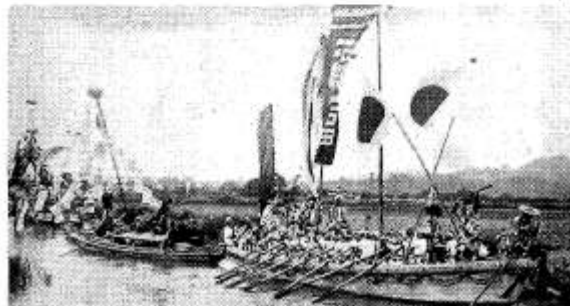
この祭りは昭和天皇の御大典の後の、1929(昭和4)年5月に8日間にあたり行われた。カルシュはこのときの一連の光景を連続的ともいえるほどにたくさん撮影し、丁寧に「シンコウシキ マツエノカミガ ナカノウミヘ」と日本語の発音で日付と共に記録している。

祭りは松江市殿町の城山稲荷神社の式年神幸祭で、大船団とともに、ご神霊を東出雲町出雲郷の阿太加夜神社へ運び、往復する。

ホーランエンヤ



⑤出発前の踊り船⑥大橋のそばの船行列＝いづれも若松秀俊教授提供



「ホーランエンヤ」という名で、地元では親しまれている。広島宮島管絃祭、大阪の天神祭とならぶ、松江が誇る日本三大船神事の一つ

折、暴風雨で座礁しかけた神輿船を馬場の漁師が助け、阿太加夜神社に無事送り届けたのが、引き船の始まりという。五穀豊稔と民衆の幸福

繰り出す鼻曳船を先頭に、権伝馬船と呼ばれる踊り船、神輿船など約100隻の延々1キロに及ぶ船行列が見られた。権伝馬船は金色の宝珠を

(東京医科歯科大学院) 教授 若松秀俊 (敬称略)

この祭が今年5月、12年ぶりに開催されるが、カルシュの残した記録とどう違うか、極めて興味深い。

ドイツ人哲学者がみた

鳥根・日本

30

松江市の街中から少しはずれた通りに、人々から通称「子供の稲荷」と呼ばれ、親しまれている稲荷神社(石橋3丁目)がある。

正確に言えば児守稲荷神社。そこでフリッツ・カルシュは何度かお祭りを目撃した。御大典やホーランエンヤを見て以来、日本の祭に宗教的意味を含めて大きな興味を抱いていた。

写真には1932(昭和7)年4月16、17日の日付が添えてあり、稲荷神社の祭りの喧騒が生き生きとよみがえってくるような場面をたくさん残している。伊勢からの芸人や神輿の様子は服装やしぐさがとくに珍しかったのであろう。カル

児守稲荷神社

祭りの喧騒 生き生き

シュは熱心に、このときの光景を様々な角度からたくさん撮影している。地元の人によれば、昭和の初めこ

るまでこうした光景が見られたという。小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)はこの社の願かけの絵に興味をもってよくここを訪れたという。八雲は著書「知られぬ日本の面影」で「子供の稲荷とよばれる稲荷神社がある」「靈験あらたかのような」と紹介している。

子供の日常を描いた絵がたくさんみられるし、何となく子供のためのお稲荷さんとして御利益があるような気がする。この神社は、以前は亀田山(現在の城山)にあったが、1607(慶長12)年に堀尾吉晴による築城のため代替地に移動し、後の変遷を経て、1742(寛保2)

年に今日の地に至った。病氣平癒の祈願など広く一般市民に信仰された。その靈験により10代藩主の松平定安から「児守」の2文字を賜り、「児守稲荷神社」と称したが、音から意味が転じて「子供稲荷さん」とよばれ、子供の守り神として現在にいたっている。社殿前に張られた願文には子や孫の成長と安全を祈願する親心がうかがえる。

(敬称略)

(東京医科歯科大学院) 若松秀俊 教授



児守稲荷神社の祭礼の山車、1932年4月16、17日



伊勢からの芸人、いずれも若松秀俊教授提供

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

31

生徒とのやりとり、一時帰国時の歓送会、雨の日の生徒との心の交流、下宿での生徒とのやりとり、哲学書

の話などが残っている。いずれも、カルシュの人物を物語っている。教室では、自分の信条に反する「マルクスの思想」についても生徒の要請があれば、それを分かりやすく、かいつまんで教えてくれたという。アリストテレスを信奉していた岡崎道夫(9期文科乙類)が真顔で

語ってくれた。文学への興味と自由の概念の影響を受けたという俳諧研究者の宮田正信(同)もカルシュがどれほど生徒に慕われていたかをこやかに語ってくれた。同じことは、カルシュを人生の範とした奥野良臣(14期理科乙類)がまねて示してくれた口癖「ありがとうさん」

からもわかる。ときにカルシュは、官舎の自宅を開放して生徒との交流に努めた。その例を示す写真も見つかっている。1927(昭和2)年3月の添え書きのある写真は、中村俊雄(4期理科乙類)、片山光治(5期文科乙類)、三宅寿(5期理科乙類)を招いた際に撮影したとみられる。

(敬称略)
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊

慕われ交流、逸話多く

自分の学問的立場をふまえて一貫して日本の文化や宗教を研究していたフリッツ・カルシュは、出雲での暮らしを通して西洋と東洋の文化を洞察的に比較していた。その証しが旧制松江高校(現・島根大)の生徒との対話や講義録の中にかがえる。

カルシュに関する逸話や教え子の手記は数多く、その中にカルシュの人物像が繰り返し語られている。これらより、いかにカルシュが慕われていたかを知ることができる。拙著「湖畔の夕映え」でも述べたが、それには教育上の大きな意味があると思っている。同じように教師の身である筆者の立場からみても、重要な教育に対する問いかけをしてくれる。

カルシュと生徒とのエピソードには、野外授業での

旧制松江高の生徒らと



①生徒とともに松江高校の玄関前で。中央がフリッツ・カルシュ
②カルシュ夫妻と生徒(上列左から中村、片山、三宅)、1927年3月、自宅前で。いずれも若松秀俊教授提供

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

32

嵩のふもとに

の弊害」という新聞の社説を自らドイツ語に翻訳して、それをもとに堂々と演説したことが記録に残っている。

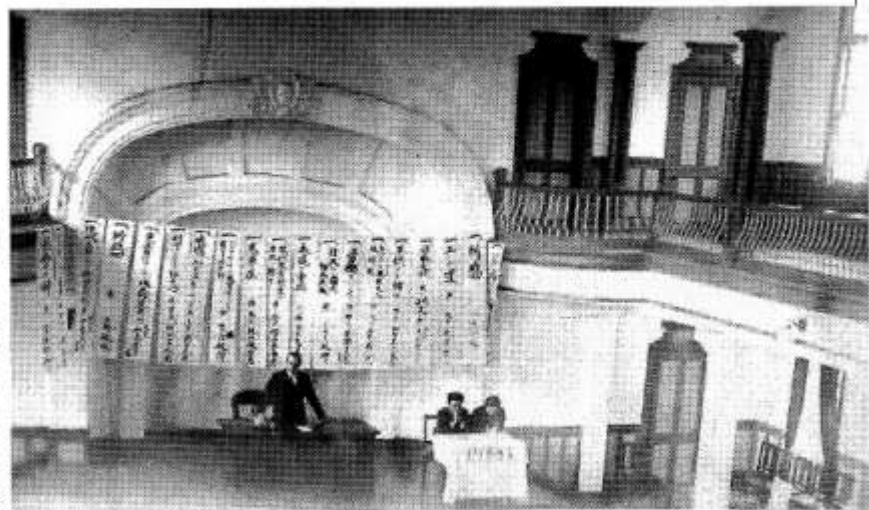
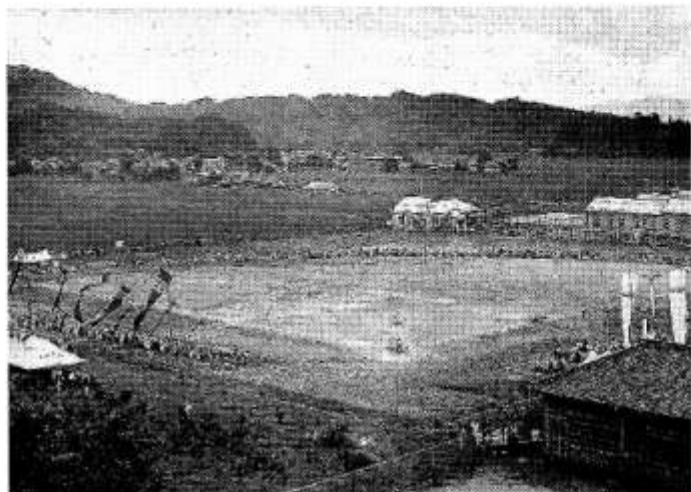
高田が辞書と首っ引きで書き上げた草稿は、小林松次郎主任教授によって真っ赤に直された。高田はその原稿のすべてを暗記していたと、同級生の白石磯が筆者に語ってくれた。高田の演説の後でカルシュは称賛

旧制松江高校(現・島根大)と旧制大阪高校(現・阪大)の野球の試合を、フリッツ・カルシュが撮影した写真が残っている。また、全部がカルシュの撮影ではないが、記念祭と呼んだ学園祭で催された弓術の試合や仮装劇など、生徒の課外活動の様子を撮影した写真も数多く残っている。

このような活動の場で生き生きとした生徒の様子をカルシュは目の当たりにした。それは本当に、楽しく心温まる、しかも感動的なひとときであったに違いない。

ところで、1929(昭和4)年、秋の恒例行事の外国語弁論大会が開かれた時、高田富之(9期文科乙類)が出場した。当時1年生だった彼が、「階級闘争

●旧制松江高校と旧制大阪高校との野球の試合、1926年8月●高校で開かれた弁論大会●若松秀俊教授提供



感動 生徒の課外活動

の言葉をかけて、握手を求めていたことが白石にとつては驚異であったとのことである。

もっとも、白石自身もそれこそ必死にクラブ活動に

専念して、当時の高体連でも優秀な成績を残した。文字通り全力疾走し、京大時代にもそれを貫いており、その生き方は強烈に筆者の胸を打つものであった。

その生き方は強烈に筆者の胸を打つものであった。

旧制松江高校の同窓会が発行した校史「嵩のふもと」には、当時の生徒たちのクラブ活動の様子が少な

からず語られており、その活動のエネルギーに驚かさ

れる。ちなみに、高田は後に衆議院議員となり、福永健司元衆議院議長(7期文科甲類)や細田吉蔵元運輸相(9期文科甲類)らと共に国政に携わり、自らの主義主張にとらわれず親交を長く保ったという。

(敬称略)

(東京医科歯科大学院) 教授 若松秀俊

ドイツ人哲学者がみた

鳥根・日本

33

旧制松江高校(現・島根大)の奥谷官舎(松江市奥谷町)の斜め向かいに、当時、同校で学務を担当していた渡部愛之助の家があった。

1930(昭和5)年6月、渡部家の新しい木造家屋の建築が始まった。フリッツ・カルシュにとつては、その工程がとても珍しかったのであろう。地ならしから始まり、土台が組み立てられ、少しずつ、家らしくなっていく様子を克明に撮影していた。

「お外で、あれ、何しているの? ファティ(お父さん)」

「おうちを建てているんだよ」

「この前は地面を固めていたわね。そのためのなの?」

奥谷の近所

日本建築に興味津々

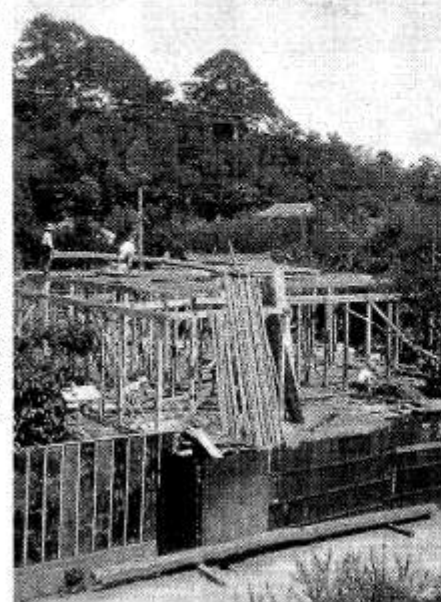
「そうだよ」
「本当? ムティ(お母さん)」
「そうだよ」
「ドイツでもそうなの?」

「いや、ドイツとは違いますが、棟上げ式を終え、本格的な建築に入ったころ、カルシュの長女メヒテルトが、母エンメラから聞いた思い出話である。

「当時、メヒテルトは2歳5カ月。とてもおしゃべりになった。彼女はエンメラが丹精こめて作った庭の空き地のプランコを見ながら、いろいろと父や母に尋ねたという。」

彼女によると、カルシュは毎日学校から戻ると官舎の2階の窓にカメラを据え、撮影していたとのことである。最初は「よいとまけ」で基礎固めをする地下足袋をはいた女性らの姿を撮っていた。夕暮れいっばいまで続いた作業の後に、渡部家から毎日運ばれていた酒肴で一日をしめくくる。そんな光景もカルシュにとつてはとても興味深かったのであろう。

(敬称略)
東京医科歯科大学院
教授 若松秀俊



①土台の基礎固め ②渡部家の家屋建築の様子、1930年6月20日 ③いずれも若松秀俊教授提供

ドイツ人哲学者がみた

鳥根・日本

34

美保の北浦は鳥根半島の日本海に面した東端の地蔵崎から西の七瀬港に至る約8kmの海岸線をいう。この辺りは大山隠岐国立公園に含まれる景勝の地で釣り場としても人気が高い。

美保湾側とは対照的に岬、湾、絶壁、洞窟、岩礁など荒々しい様相をみせており、景勝地として広く知られている。その代表的景観は東端に近い早見ヶ鼻、出雲赤壁、海水の浸食による洞窟などである。なかでも出雲赤壁は天に向かってそそりたつ赤褐色の絶壁で、その雄大な美しさは、目を見張るものであった。フリッツ・カルシュは印象に残った海岸の写真だけでなく人々の仕事や生活の様子も記録している。その例が漁に出ようとしている

美保の北浦

漁師や網糸を紡ぐ女性の様子である。

北浦は古くから海水浴場としても有名で、カルシュは家族と一緒に海水浴や貝拾いを楽しんだ写真を残している。長女のメヒテルトは「海の蒼さが何ともすばらしい海岸であった」と筆者に話してくれた。

話は前後するがカルシュは自転車に乗って、という

雄大、赤褐色の絶壁

よりは担いでこの近辺の詳しい「探検」をしたという。現在の松江市本庄町から手角町、そして峠を越えて行く。さらに日本海沿いの集落を通過して西に進み、北浦から千酌を抜け、笠浦

にでる。途中、自転車で走るカルシュと酒井勝郎(5期理科乙類)が出会った。この辺りは上りと下りの急な坂道があり、とりわけ同

た。日本海の荒波の浸食で、できあがった海岸線は、至るところ岬と湾で絶壁や岩礁であったからである。これはカルシュの身体に

る旺盛な好奇心を物語るエピソードである。また、カルシュが撮影した写真には巡礼者の姿も写されている。これには日本海に面した海岸で多くの難所をあえて通り抜け、心身を鍛え神仏と共に生きようとする先人の心が見えるようである。(敬称略)

(東京医科歯科大学院) 若松秀俊(教授)



①北浦の漁村の風景 ②北浦の漁民の様子 ③若松秀俊教授提供

ドイツ人哲学者がみた

島根・日本

35

日本海に臨む島根半島の景勝地へ松江から旅したフリッツ・カルシュの足跡を追ってみる。

上段の写真は、現在の松江市鹿島町手結浦である。カルシュ夫妻が友人でドイツ人のポーナ夫妻とともに手結の港に入った。そのときに撮影したものである。

手結は「たゆ」と読むが、地元では「たえ」または「たい」ともいう。写っているのは大島が浮かぶ印象的な景色である。波穏やかなときは、夕日やイカ釣り船のいさり火が海に映え、とても美しく心和む。小さな集落の漁師が小さな船着き場から出ようとしているところであろうか。

手結は「出雲国風土記」(733年)に記述があり、古くから開けた港だったようだ。現在も日本海に

手結浦

面した風光明媚な沿岸部は、港を包み込むように囲む島々があり、釣りの名所となっている。

手結の浜辺に上陸したカルシュ夫妻を子どもたちは

「アウトサイドビープル」という意味の「外人」と見て、物陰に隠れるようにして何かささやいているようであった。

じつと様子をうかがうのだった。ところが、しばらくすると、夫妻に恐る恐る近づいては、翻って戻り、そして次に大胆に、後ろから押しては顔を出し、集まり固まっては転びそろうになって、カルシュの妻のエンメラと並んで写真撮影を求めてくるのだ。

実際、長女メヒテルトに聞いた両親の思い出話から推測すると、夫妻も、やや身構えていたようだったという。和服姿の子どもたちは物珍しげに、表に出てきては友達のように隠れて、こちらを見ながら

またカルシュ夫妻に手で触れては恥ずかしそろうに笑

るというように、とにかく好奇心の塊であったようだ。

場所こそ違え、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が著書で描いている村人の様子をほうふつさせる写真である。カルシュが残した多くの手結浦に関する写真のなかに、東側の海岸の風景を映したものがあつた。この風景はカルシュのお気に入り、自らの絵にも丁寧に描いているほどである。

八雲ほうふつ子供の姿

(東京医科歯科大学院教授 若松秀俊)

(敬称略) 〓 終わり



●手結浦の港 ●手結浦の子どもたち 〓いすれも若松秀俊教授提供